World View アジア発

シリーズ「アジアほっつき歩る記」第12回

トルコ(2)　トルコを中心に世界を考える

須賀　　努
コラムニスト・アジアンウオッチャー

トルコ経済は好調

最近の欧州危機、当然トルコにも影響はあると考えたが、意外と被害は軽微に留まっている。それは歴史的に見て、ユーロの優等生ドイツとの関係が一番強いことから、影響が限定的だと説明されている。ドイツにはトルコからの移民が多数おり、その関係の良さが経済にもよい影響を与えている。

2001年の経済危機で政権が交代、2003年に就任した現職エルドアン首相による経済回復策が功を奏し、高成長を実現。特に2005年にEU加盟交渉を開始し、欧州から多額の資金を導入、2008年のリーマンショックからもいち早く回復し、７％台の成長を達成している。

トルコで聞く限り、エルドアン首相の人気は高く、その手腕はかなり評価されていた。長期政権を望む声も多く、その政治的な安定、政策の継続がトルコの成長に寄与している。中東地域の多くの国民と首脳たちからも支持されるようになって来ており、その存在感は国内に留まらない。ただ昨今のシリアとの紛争など懸念材料もある。

欧米人のトルコ利用法

日本企業におけるトルコの位置付けが中途半端と前回書いたが、逆に欧米企業はトルコをハブとして地域本部を置く傾向がある。コカコーラ、GE、マイクロソフト、インテルのアメリカ勢、ユニリーバ、エリクソン、BASFなどのヨーロッパ勢もトルコをハブとして活用、トルコから世界を考えて、戦略を立てている。

写真１　イスタンブールの高級ショッピングモール
ブランド品の子供服店

勿論彼らの狙いはトルコ国内の旺盛な消費。アラブの富豪が買い物に来ると言われる最近オープンした大型ショッピングモールを訪ねると、ポルシェやフェラーリなど高級車がそこかしこに駐車されており、金持ちのトルコ人青年実業家がブランドショップを闊歩している。ショップには高級ブランドの子供服売り場まであり、この国の若い人口、消費力の高さが見えてきた。またアラブの富豪用には、近所にシェラトンなどの高級ホテルが完備、筆者が思っていたトルコのイメージはそこにはない。

そして中東市場攻略にもトルコ人を活用している。トルコは非常に緩いイスラム教国だが、同じ宗教であり、歴史的な結びつきも深いことから、日本でも「トルコは中東へのゲートウエイ」との報道は目にすることはある。生活習慣が近いということは何かと便利だと、中東関係者は述べていた。ただ欧米人はトルコ人を使って攻めるが、日本人は自分でやりたがるため、中東攻略も思うようにいかないとの指摘があった。

世界は中央アジアに目を向け始めている

だが同時に「欧米企業の目は中央アジアに向き始

撮影：佐渡多真子

【須賀努氏のプロフィール】
東京外語大中国語科卒。
金融機関で上海留学、台湾２年、香港通算９年、北京同５年の駐在を経験。
現在は中国を中心に東南アジアを広くカバーし、コラムの執筆活動に取り組む。

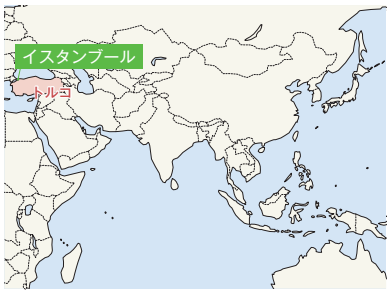

写真２　イスタンブールのオフィス街　外資系銀行もトルコ人向けビジネスを展開

めている」とあるトルコ人は解説する。中央アジアというと何となく遅れた地域のようなイメージを持ってしまうが、トルコの隣国アゼルバイジャンはバクー油田を擁して、非常に豊かな国となっている。「ここ数年でアゼルバイジャンは大きく発展し、街並みは一変している」と語る旅行作家もいる。資源のある中央アジアは、これからの大きな可能性を持った市場だと言える。

そこで重要なのがトルコ。中央アジア一帯はトルコ系住民が多く、トルコ人が入り易いマーケット。そこに目を付けた欧米企業はトルコ人を活用して、中央アジア戦略を進めている。実際ドイツ企業が、「昔ドイツに移民したトルコ人の２世、３世をトルコに戻し、そこから中央アジアを攻めている」との話も出て来ていた。

これから10－20年、欧米企業を後ろ盾にするトルコが中央アジアへ進出すると、どうしても中国との摩擦は避けられない。中国が抱える新疆は単に国内の少数民族問題に留まらず、将来はアジア全域に関わる、世界的な問題に発展する可能性すらある。

第２のタラス河畔の戦いは起こるか

「20年後に第２のタラス河畔の戦いがあってもおかしくない」とイスタンブールで会った日本人が述べた言葉は印象的だった。タラス河畔の戦いとは西暦751年、中国の唐とアッバース朝トルコが中央アジアの覇権を争った戦い。結果は唐軍が惨敗し、イスラム勢力の中央アジアでの支配が確立され、イスラム教が広まったとされる。

勿論現代の戦いは武力だけで起こるものではない。恐らくは東から徐々に支配を強める中国と西側から進出してくるトルコが、中央アジアのどこかでぶつかり、経済戦争になるという意味では大いにあり得る話であり、その結果如何では、爆発的な人口増加を示しているイスラム勢力のさらなる膨張が始まるということもあるのではないだろうか。

欧米はどこまで考えているのだろうか。中東からアフリカを攻める、トルコから中央アジアを攻める、このような状況に日本は殆ど対応していないように見える。お隣の国、中国や韓国だけを見て、ああだ、こうだと言っている内に、その向こうにはもっと大きな波が、実は既に起き上がりつつあり、一旦大きな波となって襲って来れば、その余波は計り知れない影響を東アジアにもたらすかもしれない。

日本ではよく「グローバル」という言葉が使われるが、これまで書いてきたような話を見掛けることはあまりない。だが、トルコでは、また中東でもヨーロッパでも、ビジネスの世界でも学術の世界でも、このような議論が密かになされているのであれば見逃すことは出来ない。本当の意味で幅広い視点から物事を見て、様々な角度から議論して、政策を実行していく必要があるな、残念ながら今の日本にはこの点は欠けているな、とトルコに来て感じることが実に多かった。